

『新千歳市史 通史編上巻』を手にすると

— 市史は多様な史実を書きとめた歴史辞典 —

田 村 俊 之

千歳市総務部主幹付市史編さん担当

市史編さん事業 はじめにかえて

編さん事業は、途切れることのない時間の流れの中で、現れては消えた様々な千歳の姿を史実として市史に書きとめ後世に伝えていくことが使命である。また、新たな情報や資料をもとに、これまでの市史を訂正することも編さん事業の大切な役目である。

その最新の成果は、平成二十二年三月に刊行した『新千歳市史 通史編上巻』（以下『新市史(上)』）である。地質時代から太平洋戦争終戦時に至る間の色々な事柄を網羅した結果、およそ一〇〇〇ページの市史になった。

さて、市史を編さんするときには悩ましくも大きな課題がある。それは、個々の事柄が持っている歴史をどのような枠組みに基づいてまとめていくか、ということである。やみくもに出来事を羅列していくわけにはいかない。秩序を持った編さんこそが、読みやすい市史を生み出す有効な手段であり、方法である。

歴史を綴るには大きく二通りの方法がある。一つは時間軸を基本に行う方法で、〇〇時代というように時代を基準に区分し、その時代ごとにそれぞれの事柄を説明する。時代ごとの認識を深めるには大変有効である。しかし、一つの事柄の歴史は各時代に分散することになる。通史的に見たいときは各時代から同じ事柄を拾い上げなければならない煩雑さがある。

もう一つは、事柄（たとえば「空港」など）ごとに歴史を積み上げていく方法である。時代別に分散せず事柄ごとに時間に沿って通観できる便利さがある。しかし、いろいろな事柄で構成された一時代の全体像を見ようとするときには、時代を同じくする事柄を集めなければならない。両者を良し悪しで判断することは難しい。どちらを採るかは、編さん方針や取り上げる事柄の内容による判断が必要である。

『新市史(上)』では、第一編「自然と風土」が地勢・気候・生物などの大きな事柄の中でそれぞれの歴史が完結する後者の方法をとって、第二編から第四編は、時代別に区分する前者の方法をとっている。

ここまでは作り手側から見た市史編さん事業であるが、読み手側から見た市史はどうであろうか。読みやすい、読みづらい、扱いづらいなどのいろいろな意見があると思う。実際に手に取ってみると、分厚くずっしりと重い。重さで本の価値を判断できないが、市史の重さは千歳の出来事を網羅した歴史の重さといえる。とは言っても、一〇〇〇ページの厚さの本を最初から最後まで読むためには相当の時間と労力、そして覚悟が必要である。だが、果たして市史に覚悟が必要なのか。私の答えは「否」である。市史は推理小説ではない。最後まで読み切る必要は全くないと考えている。

こう考えてはどうか。市史は千歳の歴史情報を最もそなえた歴史辞典である。多岐にわたる項目をそれぞれの専門家が優れた知見でしっかりと記している辞典である。興味を持った項目を開けば、色々な場面を切り取った奥の深い新たな千歳の歴史に出会うことができるかもしれない。

そこで、これから何度も新市史を手に取るきっかけとなることを期待して、『新市史(上)』の第一編を中心に内容のいくつか紹介したいと思う。もちろん、そこを讀めと強要するつもりは毛頭ない。人それぞれに違った観点を持つことは当然であり、自分の観点を持つことは大切なことである。

どんなことが書かれているかを知るには

今さらと思われるかもしれないが、どんなことが書かれているかを知りたいときは、先ず目次をみるのが手っ取り早い。目次は本の具体的な内容をたどれる道標であり、辞典の見出しの役割を果たしてくれる。『新市史(上)』ではかなり具体的な表現の項目を目次に掲げている。

『新市史(上)』の目次は一二頁からなり、構成は、第一編「自然と風土」、第二編「先史時代から有史時代へ」、第三編「古代・中世・近世」、第四編「開拓の開始と近代社会の成立」の四編に区分している。この種の本づくりとしては、基本に沿った一般的な構成方法をとっている。編の下には章・節・項・細項目(項を構成する個別の説明項目)がある。難しい表現は少なく具体的にであるが、ページ表記が節ごとであるため引きづらく感じるかもしれない。

『新市史(上)』の項・細項目数はおよそ七六〇になるが、ここをしっかりと確認すると市史に綴られた事柄を具体的に知ることができる。特定の事柄を調べるときには特に頼りになる存在になる。

なお、細項目にない事柄も本文の記述の中に含まれている場合がある。『新市史(上)』の巻末には索引を設けており、語句から記載ページを見つけることができる。すべての語句を網羅しているわけではないが、重要と考える人名・固有名詞を主に採録している。目次で見つからない事柄は、関連する語句を頼りに索引から探す出すことができるかもしれない。

どこから読み始めようかと迷う時は

私のお勧めは、第一編「自然と風土」の第六章「地名解」である。地名は地形と同様に土地に刻まれた歴史である。地形の多くは自然の営みの中で生まれてきたものだが、地名は人が名づけたものである。古くから伝わる地名は、なんとなく付けられたものはない。人々の生活や信仰と深く結びついたものであ

り、地形的な特徴を巧みに表現するものであった。人と土地の歴史を知らしめるもつとも身近な存在は地名である。そんな千歳の地名の由来を解いているのが第六章である。

第一節では千歳の旧名である「シコツ」の意味と変遷を絵図や文献を精査し、「千歳」に改名した経緯を明らかにしている。改名についての顛末は、釜加神社の弁財天御厨子の裏面に記されている。市史には原文と共に現代訳も併記してわかりやすく、実は改名したのは川(現千歳川)の名だったことも理解できる。さらに、弁財天の造営や、旅日記を通して道路事情など、当時の千歳の状況を紹介している。なお、御厨子は地名の由来を記した当時の貴重な歴史的資料として市の重要文化財に指定されている。

第三項からは「シコツ」という地名が実際の千歳の地形の中で、どの地域を指していたか推理している。これまで様々な説があったが、説得力のある推論を提示している。

第二節から第六節までは、市内の地名について千歳川水系を中心に流域をめぐり地名の由来を解いている。その数は一五五カ所にのぼり、元になったアイヌ語とその意味を示しながら、これまでの研究者の見解を紹介している。

地名の多くはアイヌの人々が発した言葉を和人が聞き、カタカナ表記で書きとめたものである。聞き手によって異なった音に聞こえることも多々あったと思われる。また、アイヌ地名そのものも長い時間の経過の中で短縮や音の変化が生じてくる。この辺に今日の地名の解釈に違いが生じる要因がある。それもまた地名解の醍醐味でもある。

なお、現在の千歳市の町名については、守屋憲治が鋭意取り組んだ本誌の「現代千歳の町名散歩」を是非読んでいただきたい。現在の町名が今に至った変遷名づけた人々の様々な思いと理由を明らかにした。

千歳の自然をもっと知りたい時は

千歳は人口九万五〇〇〇人を超える都市でありながら、森林、河川、火山、湖などの多様な自然に恵まれている。この豊かな自然の歴史は、第一編「自然と風土」にまとめられている。千歳の自然の概略を知りたい時は、第一章「千歳の地勢」がよい。地形や地質、動植物などが簡潔にまとめられている。

さらに深く知りたい場合は第二章以降を読んでもらいたい。注目は第二章と第四章である。第二章「千歳の気象」は国土交通省気象庁新千歳空港測候所の現役職員（当時）によるもので、明治二十六年の千歳の気温観測記録をはじめ気象観測の沿革や、観測地点の変遷を紹介している。また、詳細な観測データを駆使した図表により千歳やその周辺の気象現象を解説し、これまでの市史にくらべ格段に豊かな内容になっている。章末には気象災害史と題する江戸時代の寛文七（一六六七）年から平成二十（二〇〇八）年にわたる年表を付しており、千歳が火山噴火や大雨、雪害などを被ってきた状況が「ぶさ」にわかる。

第四章は「生物の分布」である。実は生物については新市史以前の『市史』（昭和四十四年刊）と『増補』（昭和五十八年刊）では全く触れられていない分野である。新規に取り組んだ分野であり、生物に関心がある方には是非、目を通していただけたい。

その内容は、市内で確認した動植物のデータをもとに、氷河期から今日に至る植生の変遷をはじめ、生息する哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、魚類などを解説している。特に市内で確認した二・四種に及ぶ鳥類の観察年・月、場所、生息区分を示した一覧表が圧巻である。また、モラップの湧水でしか生息が確認されていない世界で唯一のトビケラ（水生昆虫）を紹介している。

このほか、第三章「千歳の生い立ち」は、北海道全体の造山活動・地殻変動が千歳域に及んだ影響を、地質や千歳鉱山などとの関連性を示しながら解説している。さらに千歳の特徴ともいえるべき火山灰台地を形成する火山灰について

も、噴出源や噴出年代や古砂丘の状況、当時の植生などの復元を試みている。今、眼前に存在する穏やかな山並みや千歳川などの風景に潜むダイナミックな自然史を知ることができる。

また、第五章「自然環境とその変遷」では千歳が位置している石狩低地帯が生物の重要な分布境界域であり、「北方由来の生物と南方由来の生物の接点として生物地理の面からみて大変興味深い地域」であるという。さらに最近の外来生物の影響なども、興味深く身近な問題として読むことができる。

第二編以降はどんな内容か

第二編からは、いよいよ人の歴史である。第二編「先史から有史時代へ」・第三編「古代・中世・近世」・第四編「開拓の開始と近代社会の成立」の三編から成り、分量は市史全体のおよそ八割を占める。

第二編は千歳に人が暮らし始めた旧石器時代と、その後の縄文時代から江戸時代中頃に至るまでの生活文化を解説している。千歳市域では昭和五〇年代前半から新千歳空港や高速自動車国道などの高規格道路の建設による大型工事が相次いだ。それに伴って大規模な埋蔵文化財の発掘調査が長期間にわたって実施されてきた。その結果、旧石器時代から近世に至る様々な遺跡の調査により、膨大な資料と情報を得ることができ、当時の文化や社会、環境などの説明が大きく進展した。その成果が『新市史（上）』に盛り込まれている。

第三編は、奈良平安時代の古代、室町鎌倉時代の中世、織豊時代から江戸幕府終焉までの近世を扱う。第二編が考古学的調査の成果に依るものであるのに対し、本編は主に文字によって残された記録（文献）に基づいたものである。古代から中世にかけての北海道を舞台にしたアイヌ民族と和人の動向、本州との関係や周辺諸国との関わりなどを詳しく解説し、その中で千歳の状況を示している。近世になると北海道は函館を中心とする道南部が和人の支配下にな

り、交易を中心とする経済活動が益々活発になる。千歳（シコツ）は幕末期まで内陸部の重要な交通・交易の要衝として様々な文献に度々登場する。第三編には千歳が当時の社会の中でどのような状況化にあったか、どんな役割を果たしていたのかを詳しく解説している。

第四編は、明治維新から太平洋戦争終戦時までを記した。この編は明治維新などの歴史的な転換点を画期とする時代区分により七つの章を編成している。各時代の行政史・産業史・交通史・社会史・文化史・教育史など、色々な分野の歴史をたどることができる。

たとえば、第四章第五節第三項は「着陸場」である。今日の新千歳空港につながり、千歳のアイデンティティの一つでもある着陸場建設の顛末が詳細に描かれている。建設に参加した人々の証言、最初の飛行機の着陸位置や機種の特定、さらには操縦士の生涯にも触れており、当時の情景が鮮明に浮かび上がる。

アイヌ民族の歴史について

ここまであまり触れてこなかったが、千歳の地にもっとも長く居住してきたアイヌ民族の歴史は是非知っていただきたい市史である。アイヌ民族は北海道を中心に生活し、縄文時代の文化や人の系譜を引き継いできた人々である。その長い歴史は、市史においても第二編以降の各編にわたって登場する。第二編第五章は「アイヌ文化期」である。アイヌ文化の成立は一般的に一二世紀後半～一三世紀といわれているが、今日、古いアイヌ文化の記録は幕末期のものがほとんどである。成立期から近世初頭までは空白の時代と表現されることもある。しかし、市内の大規模工事に伴う低湿遺跡の発掘調査によって江戸時代初頭の木製の道具類などが低湿遺跡から次々と出土した。これらを江戸時代末期の記録や近代に作られた道具類と比較した結果、伝統的なアイヌ文化が今日まで継承されていることを確認できたのである。このほか、第三編では古代・中

世・近世という北海道史の中でのアイヌ民族と和人の関係、第四編では開拓と同化政策に翻弄されたアイヌ民族と千歳の状況を解説している。アイヌ民族の系譜は、第二編第四章の「先史文化人の形質」と第二編第五章第七節の「骨から見たアイヌ」に詳しく、「アイヌは日本列島の縄文人や北海道の続縄文人を母体にして成立した集団」であることを述べている。

『新千歳市史 通史編下巻』の編さんに向けて

さて、本年五月より『新市史（下）』の編さん事業が本格的に始まった。事業については本誌の『新千歳市史 通史編下巻』の刊行について詳しく説明がある。また、本市ホームページにも執筆予定の目次も含めて公開しているが、その一端を紹介したい。

下巻は太平洋戦争の終戦後から現代までの時代をたどることになる。現在もその時代を過ごした多くの方々が存在であり、極めて身近な過去が対象になる。いわば現代史であり、第五編の「戦後の行政」から始まり第六編「部門史」、第七編「資料」で構成する。

下巻の大きな特徴は部門史を設けることである。部門史は、事柄（たとえば「空港」など）ごとに歴史を積み上げていく方法を用いる。部門別に区分した一六の章とその下に七六の節を設ける予定である。

おわりに

時に「良いか悪いかは歴史が判断する」という言葉を耳にすることがある。しかし、歴史は良い悪いを判断しない。歴史に良い悪いの区分はなく、ともに歴史の一部であり、史実にしか過ぎない。その一方でどうも言える。悪しき出来事ほど歴史の教訓となり未来への指針となる。いずれにしても、今日の千歳を成した歴史の事実をたどるのが市史である。